

二、正しい方法

「諸有衆生、其の名号を聞きて、信心歡喜せんこと乃至一念せん。至心に回向せしめたまへり。彼の国に生ぜん願ぜば、即ち往生を得、不退転に住せん。唯五逆と誹謗正法とをば除く」と。

以上は、まことに『大無量寿経卷下』の初めに光っている絶対尊重なる文字、いわゆる第十八願成就の文である。

大法は人間の一切を超えて常恒不変である。しかも、かかる大法は必ず人間の上に生きなくてはならない。人間に知らされなくてはならない。しかるに大法が如何にして人間のものとなるか。それには必ず、大法それ自身の意志と、人間の人間としての約束と、その二者が一致して、そこに正しい方法が生れなくてはならない。如来の大生命たる本願が衆生の上に回向されて衆生を救い、如来のみ光が人生に訪れて人生の光となりたまうには、そこに必ず正しい方法があるに違いない。甲の器の水を、乙の器に移すにしても、甲の石を乙に運ぶにしても、そこには正しい法則に従った正しい方法がある。真理は正しい方法によらねば決して人間のものとはならない。宗教的真理に於いては特に然りである。

今、この第十八願成就の文こそは、如来を知り、如来にふれ、如来の生命が衆生のものとなる、唯一なる正しい方法を示されたる大文字である。聖なるものが人生に実現されて、人生の内容となり、三毒以外に何ものをも持たざる衆生の人格の本質となつて、救済を成就し、自覚を生きたまう唯一の正しい相を示されたものである。

しかして、これは又同時に、久遠の本仏の真意に徹したまう娑婆の化主、教主世尊、大善知識の、我等衆生に向つて教えたまう全てであり、したがつて教主としての正しい態度である。教主世尊は、久遠の本仏の人生に向つての還相の相であるが故に、本仏の魂そのままを自己の魂としたまうと共に、如何にすればこの仏心を衆生の上に顕現し、教主善知識と同一に衆生が念仏し自覚し救済されるかを知りたまうのである。

我等は、まことに我が慈父にてまします世尊の前に合掌して、その教化の言のままに聞かねばならない。